
自走都市上の恋人

亥月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自走都市上の恋人

【Nコード】

N8150Y

【作者名】

亥月

【あらすじ】

未来の自走都市Flow上。

そこにいるのは、どこか幼稚な少女と、おかしなところが律儀なトカゲだけ。キスもできない二人の、遅々とした恋愛模様は、時速二〇キロそこらで展開中。

今日は、晴れてるね。雨は降らないらしい。都市の速度は時速二〇キロだつてさ。

散歩がしたい。外を歩くといえば、そうだ、新しい靴が欲しいな。無機質な、つるつるした生地は嫌だけど。

三番街のデリで、スラッピー・ジョーが食べたい。今は朝だけど、昨晩から、何も変わらないね。

それでも、今日も今日とて、あたしはきみが愛しいのです。

思考伝達を主とする音声干渉インプラントを媒体に、今日も愛の言葉をささやいてみる。ひそやかなそれは、巨大な都市の片隅では彼に届かない。

ああ、今日は十一月の二四日。ゆっくりと移動する、イタチのようなかたちをした自走都市は、彼女を背に乗せて悠々と浮遊しながら歩いている。現在は、反重力素子出力方式で移動している様子だった。愛の言葉をささやいた彼女は、都市の中央にそびえ立つ、灯台にも似た高層居住宅《ハイ・シエルター》の一室で膝を抱える。

「ねえ。返事くらいしてよ」

拗ねた口調で唇を尖らし、淡い鳶色に艶めく髪を、細い肩に流した彼女は肉声で呟いた。おもちゃの彩色のように単純な赤、トイ・レッドとオフホワイトを基調にした、清潔な部屋。ビーズ・ベースを詰め込まれた、巨大な枕にも似たソファに小柄な身体を沈ませて。彼女は、円いかたちの窓を覗き込む、愛しの彼を見下ろす。

『つるさいんだよ、あんたは』

不意に、部屋の壁に埋め込まれたスピーカーから電子音声の音が響く。低く掠れた、男の声。それに驚きもせず、むっとした顔のままで、彼女は膝を抱えた。

前髪を三分の一ほど、左方に分けて左に流し、サイドの髪も巻き込ませながら髪留めで固定するヘアスタイル。彼がよく似合うと言ってくれた髪形だったのを、彼女は律儀に覚えている。窓を覗き込んでいた彼は、怪訝そうに振り向くと、機嫌を損ねた小さな恋人を注視した。

『独り言みたいに話しかけるのやめてくれるか？ 反応するのに困るんだよ』

「あたしのこと、すきじゃないの？」

『あんたのことはすきだ。だが、そういう風にべらべら語りかけるな。うるさいし、幼稚だ』

容赦ない言葉を浴びせかけられ、彼女の機嫌は急降下。ビードロのように辺りの景色を映し出す、瑠璃色の大きな瞳を眇めて、ずっと抱えていた膝を下ろした。行儀よくソファに座った彼女は、じつと自分の恋人を睨む。

「きみの、そういう態度は嫌い」

『けど、おれのこととはすきなんだろ』

意地悪な問いに、彼女は口を噤んでからそっぽを向いた。

まったく、勘弁してほしいものだ。心中でそう呟きながら、彼は緩慢に瞬きする。

『身体だけ大きくなっても、精神的にあんたはひどく幼いんだな』

口を利かない、可愛い恋人に対し、彼は最後までつれない態度を

取る。首を回し、窓の外を覗き込んだ彼の視界には、移動する都市から臨む景色。

広大な草原だ。この場所が未来に残るものだったという事実は、所詮は他人によって決められていたことだったのだが、それでも感慨深い。

「きみは、あたしに意地悪してるの？」

『あんたがうるさいからだ』

「好きでうるさくしてるわけじゃないのに」

『あんたの愛の言葉は、独り言と同義なのか？』

「違うよ。ただ純粹に会話したかっただけなのに」

『会話してるだろ。これじゃ満足できないのか』

恨みがましげな彼女は、彼のそっけない態度に耐えかねて、ソファから立ち上がった。

数歩の距離をすぐに縮めて、彼の元へ辿り着くと、音もたてずにそこへしゃがみ込む。

『泣くなよ』

感情の堰が切れるのを牽制すると、彼はやっと彼女に優しげな視線を向けた。

『からかっただけだ。おれはこんな身体だからな、愛情表現も限られてる。だが、愛の言葉をささやくだけじゃ薄っぺらいだろ』

「きみの愛の言葉はいらない。けど、きみの愛情表現は寂しいよ」

薄く涙の膜が貼った瞳を見やって、彼は小さく喉を鳴らす。

彼は、彼女にキスできない。抱きしめることもできない。手をつなぐこともできない。

身体を重ねることもできなければ、肉声で愛をささやくこともできない。

それでも、彼は彼女が好きなようだ。

『おれがコモドドラゴンじゃなければ、あんたはもっとおれのことを好きになるのか？』

未来に生き残った恐竜。それが彼の姿。

微細な電腦チップの中で、単純に人間の男性として思考している。

「きみがもし人間だったら、嫌い」

コモドドラゴンだから、すきな。

少し考えた後に、電子の声でささやかれたその言葉は、純粹な彼女の愛の言葉。しばらくしてから、部屋には涼やかな笑い声と、拗ねてしまった様子の彼が彼女を突っぱねる電子の声が響く。

なんだかんだ言っても、結局は離れられない様子の二人を背負ったまま、未来の自走都市はただただ浮かんで動くだけ。

『テラ』

「なに、口ホック」

『あんまりのしかからないでくれるか』

「いいじゃん」

朝は、硬い鱗越しの微妙な体温を感じながら。

テラと呼ばれた少女は、愛しいトカゲの恋人口ホツクの背に身体を預けてみた。

現在時刻、午前七時八分四九秒。

自走都市には、彼女と彼以外、誰もいない。

(後書き)

ご無沙汰です。

半年以上も放置していたのに軽く驚きました。更新率ばかり。

最近はSFにどっぷりハマってます。マルドゥック・スクランブルを読んでからが、本当にやばいです。ウフコックがイケメン過ぎるんです。ネズミなのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8150y/>

自走都市上の恋人

2011年11月24日02時53分発行